図書館だより

第15号

1987. 4. 15 発行

編集兼発行　三重短期大学附属図書館　514-01　三重県津市一身田中野字蔵付157　TEL 0592 32-2342

目　次

ケルン大学のこと……立石雅彦 (1)
衣服とことわざ……伊藤五子 (3)
新規受入図書案内……(5)
ベスト　セラーズ……(10)

ケルン大学のこと

立石雅彦（法経科教授）

ケルン大学は、市の中心部を少し西にはずれたところにある。約1年間お世話になった刑事学研究所は、市を二重に取り巻く環状緑地の内側のものに接して建っている大学本館の一番下の階にある。正面の大学通りから入ると階段を下に降りることになるので地下一階ということになるが、緑地側が道路より低いので裏口からは、階段を昇らなくてもそのまま外にでることができる。研究所は三重短期大学の管理棟全体位の広さがあり、いくつかの部屋に分かれ、教授、助手、秘書、アルバイトの学生などが使っている。わが国と異なり、教授の仕事は、秘書、数人の助手、多くのアルバイト学生によって支えられており、極めて効率的である。その権限も大きく、大抵の業務は独自の裁量によって行うことができるようである。私生活に至るまで、困ったことがあれば秘書に頼むと、殆どのことが直ちに解決したのには、慣れない外国生活を送っている身には、大いに助かった。もちろんわたくしをお世話下さったヒルシュ教授の個人的な親切を忘れることはできない。

ここには刑法、刑事訴訟法、刑事学関係の文献が揃っていて専門図書館の機能も果たしている。廊下には4メートルもあるかと思われる天井まで達する書架に文献がつまれているし、各部屋にもそれぞれ分納されているからその数は膨大なものになるだろう。アルバイト・チンマーと呼ばれる部屋には刑法、刑事訴訟法の基本的文献が備えてあり、学生が勉強している。ここでは、ゼミナールも行われる。

こうした研究所は、日本の大学附属の研究所と違って、学部の構成単位であり各学部の教授はいずれかの研究所に所属している。法学部にはこのほかに学部全体の図書館がある。これは研究所の一つ上の階にあり、誰でも自由に入ることができる。入口を入った廊下には、コピーの機械が10台程ならんでいる。ここでは、10ペニヒ（約8円）を入れれば1枚、1マルク（100ペニヒ）を入れれば10枚コピーすることがで

きる。わたくしもこれには大変お世話になったが、機械がなかなか空かないことと、1マルクと10ペニヒの硬貨を沢山用意しなければならないことには泣かされた。コピー機がこんなに沢山並んでいるのは貸出を原則として許さないからであろう。

コピー機の向こう側には図書カードが置いてあり、これで必要な文献の収納されている場を知ることができるのは本学と同じである。本は専門分野別にいくつかの部屋に分けて置いてあり自分でその部屋へ行って手にすることができる。それぞれの部屋には机と椅子が置いてあり、学生が熱心に勉強している。収書事務は別として、日常的にこれら膨大な本を管理しているのは、入口に座っている閲覧係のおじさん一人であるようだ。こうしたことが可能なのは、開架式であること、貸出をしないことによると思われる。どうやら本には磁気がかけてあるらしく、あるとき学生がうっかり本を持ったまま外に出ようとしたらブザーが鳴ったことがあった。この方法は日本の図書館でも採用しているところがあるとか。ここに置かれているのは、法学一般の基本的文献、雑誌、政府や議会の文書等が中心で、専門の文献については各研究所に行って見つけることになる。

学生は図書館でも研究所でもよく勉強しているように思われた。これだけの環境を用意されれば、意欲のある学生は不自由なく勉強できるだろう。大学にも規模のメリットがあることを痛感させられた。もっとも学生が勉強するのは向学心からばかりではない。講義では、頻繁に宿題や試験が繰り返されるので、勉強せざるをえない。さらに、西ドイツでは法学部で学んだというだけでは社会的に評価されない。国家試験に合格して初めて法律家として企業に就職できるのであるから、これを通過するためには勉強せざるを得ないのである。

さて、勉強に疲れたら外へでよう。先程述べたように裏口から出ればそこは緑地公園である。ここは第一次世界大戦までは市の防衛のための要塞用地だった。中世のケルンを取り巻く城壁はこの緑地より1キロ足らず内側にあり、19世紀後半に取り壊されて以降リンクと呼ばれる環状道路になっている。いまでもいくつかの市門が残されているからそれと知られる。従って、この緑地はいわば外堀だったといってよい。それを環状の緑地公園にしたのは、後の西ドイツ初代首相になった当時のケルン市長コンラート・アデナウアーであった。夏の午後ともなれば、広い草原の上で日光浴を楽しむ姿が見られる。

緑地の向こうに建っているのはメンザ、すなわち大学食堂である。学生はここで安価な昼食または夕食をとることができる。これには州政府が補助金を出しているという。そのためか食券を買うときには学生証を提示せよと張り紙してある。しかし、実際には提示を要求しないので、ときどきわたしも州政府の好意に預かった。そのほかに値段は少々高いが自由選択の食事もあり、こちらは誰でも利用できる。ここで東アジア料理週間が開催され、日本の写真などが飾られドイツ女性の着物姿が見られたことがあったけれど、料理そのものは日本の味を思い起こさせるものではなかったのは残念だった。メンザ横の電車通りを渡った緑地には時々ヘリコプターが降りる。これは緊急の患者を大学病院に運ぶためのものだとか。その先には理工系の建物が並んでいる。緑地を反対側に歩くと、本館と並んで経済社会学部の建物があり、さらに進めば大きな池にでる。その辺には日本文化研究所があり日本の書籍もいくらか置かれており、日本の新聞を見ることもできたが、相当遅れていた。

本館の正面玄関を出ると道路はトンネルに入るように地下にもぐっていて、安全に哲学部の建物、講義棟、大学図書館に行くことができる。これらの建物はコンクリートむきだしの現代建築である。講義室は1000人は入ろうかという大教室であり、日本の大規模大学でよく見られるものと同じである。いわばマスプロ教育だが、それをゼミナールなどで補っているのだろう。その他にも、助手などがチューターをする研究会も盛んだと聞いた。その先は医学系の建

物が並んでいる。あまり広いのでその果てまで行ったことはない。

こう書き並べてみると、日本の大きな大学とそれほど違わないキャンパスのように思われる。

しかし、ドイツの歴史ある大学は特定のキャンパスをもたず市街地のあちこちに商店、民家と並んでたっている。例えば、日本人にもよく知られているハイデルベルクはそうである。もっとも、大学の発展に伴い市街地には用地が見つけにくくなり、郊外に新しいキャンパスを作ってはいる。ケルン大学が１３８８年の創立という古い歴史を持ちながら、他の伝統ある大学と少し違っているのは、１００年以上に渡って閉鎖されたことがあるからである。フランス革命後ライン河左岸はフランス領に併合されたが、時の学長がフランスに非協力的であったことから大学は解体されてしまったという。ウィーン会議後ケルンを含むラインラントはプロイセンの支配化に置かれ、すぐ南のボンに大学があったこともあってか、再開はなされなかった。ようやく第一次世界大戦の終了後１９１９年既にあった商業専門学校を土台として大学が再び創立された。これにも、アデナウアーの力が大きかったということである。あの大学本館は、１９３４年の竣工であるが、完成を祝う席にはアデナウアーはいなかった。既に政権を取っていたナチに市長の座を追われていたからであった。第二次世界大戦後大学はケルン市からノルトライン・ヴェストファーレン州の管轄するところとなり、西ドイツでも有数の規模の大学に発展したのである。

こうした大規模な大学からわたしたちが直接学ぶことは必ずしも多くはないかもしれない。西ドイツの大学の数はわが国と比べ極めて少ない。それぞれの大学が充実したものになるのは当たり前である。しかし、本学のような小規模な大学にもそれなりの道があるはずである。例えば、教員と学生の緊密な関係は大規模な大学では得られにくいであろう。地域との密着という点でもメリットがあるかもしれない。小規模というデメリットは他大学図書館などとの連携の強化によってある程度解決できるかもしれない。大学の発展は、大学だけでは如何ともしがたいことも事実であるが、長い困難な歴史をもつケルン大学を緑地のベンチに腰掛けつつ眺め、本学の発展も遠い将来をにらみつつ考えていかねばと思った。

衣服とことわざ

伊藤五子（家政科教授）

私達の生活の中で、物質的に最も関心のあるものをつきとめてみますと、衣・食・住の三つになるのではないかと思います。暖衣飽食時代といわれる今日、私共の衣生活をふりかえってみるとき、“豊かな”という時代を越え、着捨ての時代ともいわれるようになりましたが、衣服は最も身近にあって、片時も離すことのできないものであることは、今も昔と変りはありません。衣服と人の心のかかわりは深く、物の例えや形容詞にもよく使われてきました。これは身近なものであることと、衣服は誰もが深い関心を持っているからであろうと思います。

ことわざ辞典をみますと、衣生活に関係のあることわざや故事、格言などは３００を越えるのではないかと思われるほど沢山あります。

元、京都工芸繊維大学 熨斗（のし）教授が、衣服に関係あることわざをあげ、女子大生がどの程度知っているか調査された報文がありますが、その結果から、知名度の高かったもの３位までをみますと、１位は「着たきりすずめ」で、４年生女子大生９７％（８３％）　短大生６７％（４４％）〔（　）内は各々その意味がわかる人の割り合い〕２位は「京の着倒れ、大阪の食い倒れ」で、大学生９６％（７５％）　短大生７８％（２１％）、３位は「袖にすがる」大学生８９％（５５％）　短大生５６％（１６％）でありました。これをみますと、女子大生のことわざに対する関心の低さがうかがわれます。これは生活環境の変化や核家族化の影響などもあって、古くからの慣習にはなじみが薄くなっ

てきているからではないでしょうか。また外来語の普及、造語、新語の流行と、若い人には、これら直接的なものの方が“ナウイ”という感覚もあって、ことわざへの関心が薄くなっているのだと思われます。しかしことわざ、格言などには多弁を用いないで、しかも間接的な含蓄のある言葉が多く、先人の生活の一端にふれることもできるのではないでしょうか。中には現在も日常使用されている言葉もありますが、ここで衣服にかかわりのあるものを拾い出してみようと思います。

「袖にすがる」「袂にすがる」これらは、相手の同情をひいて助けをもとめること。熨斗先生の調査にもみられるように知名度も高く、比較的よく使われているようです。「袖にする」いいかげんなこと。のけものにする意。「袖の下を摑む」賄賂を強要する。「袖へ手を入れる」「袖の下」人に知られないようにして贈り、またはもらう金品。賄賂または心付けなど。「袖振り合うも他生の縁」前世からの因縁によるという意。「袖から手を出すも嫌い」非常にケチな様子のたとえ。「袖に墨つく」人に恋い慕われているしるしがあらわれること。「袖の下に回る子は打たれぬ」我が子を折檻する時の親の気持をいい、自分を慕ってくる子はかわいくて打つ気になれないということ。「袂を分かつ」人と別れる。また関係を絶つこと。「無い袖を振る」できるはずのないことを無理するの意。「振り袖の手は置きどころなし」置きどころに苦しむしゃれ。「袖褄を引く」ひそかに恋慕する。「袂を絞る」「袂を濡らす」は、ひどく泣くこと。「濡れ衣を着る」無実の罪に落し入れられること。「濡れ衣を着せる」罪をなすりつけること。「袂を払う」無理に別れてゆく。また怒って座を立つ。「裃を着る」礼儀正しいこと。「裃を着た盗人」役員が私服をこやす者。

「襟を開く」「胸襟を開く」隠しだてをしないで心の中をうちあける。「襟を正す」「襟を敛む」姿勢を正しくする。気持をひきしめる。「襟足に付く」「襟を見る」利益を目当てに金持ちや権力者にこびへつらう。「襟元から水を掛けられるよう」恐ろしさや寒さなどで身がぞくぞくすることのたとえ。「帯に短かし襷に長し」物事が中途半端で何の役にも立たないたとえ。「帯は緩くとも心は固く締めよ」遊びにふけっても心まで奪われてはいけない。「帯を切ると命が短かくなる」播州赤穂の俗言。

「手套が投げられる」（手套とは手袋のこと）争いをいどまれる。「手套を脱す」真の力を発揮する。奥の手を出す。「人の褌で相撲をとる」他人のものを利用して自分の事に役立てる。「辛抱と褌」どちらもゆるめてはならないの意。「下帯の錦」（下帯とは褌や腰巻きをいう）人に知られない物事にぜいたくをするたとえ。

「破れても小袖」質の良い物はちぎれてもなお良い性質を失わないというたとえ。「小袖一つの恩」ほんのわずかな恩のたとえ。「衣を振る」俗塵を払って志を高尚にする。また官を辞して山野に隠れ住むこと。「紺屋の白袴」自分の技術が他人のためばかりに使われ、自分にまで及ばないことのたとえ。「絹を裂くよう」かん高い鋭い叫び声のたとえ。「蓑着て火事場へ入る」自分から進んで危険を招くことのたとえ。「心に笠着て暮らせ」笠をかぶると上が見えないことから、高のぞみをしないで身分相応に暮らせ、といういましめ。「羽織を引く」寄席で次の出演者の準備が完了したという合図。

「針ある言葉」「針を吐く」とげとげしい言葉のこと。「針１本も親の恩」どんなに小さなものでも親の恩でないものは何１つないこと。「針の先で突いた程」ごくわずかなことのたとえ。「針の筵」いっときも安心できない場所のたとえ。「針は小さくても呑まれぬ」形が小さいからといってばかにできないことのたとえ。「針を棒」針小棒大の意。小さなことを大きなこととして言いふらすこと。「針を含む」悪意を持つこと。「綿に針を包む」表面はおだやかによそおっているが心の中は恐ろしいものを持っているさま。「針をなくした時は鋏を括っておけ」名古屋地方の御弊かつぎから。「針で手足を突いた時は鋏で押えれば治る」奈良の俗諺。「縫い針の知れぬ時は物差しと鋏を結びおけば

じきに知れる」これは針を落して見失なった時のまじないで、四日市地方の俗諺。「縫い糸の端の結びを人にしてもらうと子供ができなくなる」播州赤穂の俗諺。

以上は、衣服の部分や衣服の名称などに、関係あるものを使ったことわざの一部を拾い出してみました。この他、人を評価する時や、調和の良し悪し、衣生活のための教訓やいましめなど面白いものも沢山あります。これは衣服が非言語的コミュニケーションを持っていることを表明しているのだと思います。ここにかかげたものはほんの一部にしかすぎませんが、豊かさのなかで失われてゆくものをとりかえすきっかけになればと思います。

新規受入図書案内

総　　記（０００）

朝日新聞縮刷版　昭和６１年７月～１２月　朝日新聞社
国立国会図書館書蔵　主題別図書目録　日外アソシエーツ
全国短期大学紀要論文索引　図書館科学会　編
ビジュアルラーニング　平野　浩
伊勢年鑑　１９８７　伊勢新聞社

〔岩波新書〕
短編小説礼賛　服部　昭
歌い来しかた　近藤　芳美
江戸の旅　今野　信雄
プロ野球審判の眼　島　秀之助
美の近代　粟津　則雄
ゴマの来た道　小林　貞作
貿易摩擦の社会学　P．R．ドーア
古語雑談　佐竹　昭広
ガン遺伝子を追う　島　秀之助
花と木の文化史　中尾　佐助
子どもたちの大平洋戦争　山中　恒
音楽の現代史　諸井　誠
戒厳令下チリ潜入記　G．ガルシア＝マルケス
日本教育小史　山住　正己
ニーチェ　川島　瑞一

〔岩波ブックレッド〕
軍事費を読む　中馬　清福
「戦場にかける橋」のウソと真実　広瀬　隆
ほろびゆくブナの森　工道　父母道
ネパールの「赤ひげ」は語る　岩村　昇
子供の権利とは何か　堀尾　輝久
アジアの民衆　ＶＳ．日本の企業　塩沢　美代子
チェルノブイリの放射能　赤木　昭夫
原発事故　日本では？　高木　仁三郎
ご用心！　巷にあふれるいい話　木村　晋介
誰れのための援助　村井　吉敬　他
横浜事件　海老原　光義

哲学・宗教（１００）

倫理学〔新版〕　佐藤　俊夫
具体的なものの弁証法　カレル・コシーク
知られざるヘーゲル　ジャック・ドント
ヨーロッパ近世哲学の展開　戸田　洋樹
人間科学の方法論争　丸山　高司
市民的公共性の理念　横田　栄一
人間行動の心理　木村　忠生　他
発達心理学総論　エイジング
環境心理学による生活デザイン　A．メーラビアン
慾求心理学トピックス　斉藤　勇

ユングと脱近代　P．ホーマンズ
ニーチェ全集 II期　ニーチェ
ヘーゲル左派論叢　ヘーゲル

歴　史（２００）

近世古文書解読字典　林　英夫　他
人物書誌大系　深田　久弥　堀込　静香
人物書誌大系　金子　光晴　原満　三寿
人物書誌大系　葉山　嘉樹　浦西　和彦
人物書誌大系　山本　周五郎　木村　久邇典
世界現代史　２０巻　藤村　道生　他
アメリカを知る事典　斉藤　貞　他
アメリカ歴史統計　アメリカ合衆国商務省　編
国史大辞典　国史大辞典編集委員会
西洋人名よみかた辞典　Ⅰ　Ⅱ　Ⅲ
日外アソシェーツ
日本民衆の歴史　１～１１　門脇　貞二　他
ビジュアル版　世界の歴史　１～２０　講談社
ユーラシア文化史遺書　１～１２　吉川弘文館
明治期作成の地籍図　佐藤　甚次郎
都市空間の立体化　戸所　隆
都市化の地理　服部　銈二郎
山村の文化地理学的研究　松山　利夫
計量地理学概説　石水　照夫
地誌学を考える　中村　利郎　他
地理学を学ぶ　竹内　啓一　他
ふるさとの誇り
風物詩　東海　'８３　中部経済新聞社
世界各国便覧　トルコ共和国
日本国際問題研究所
天皇の軍隊と南京事件　吉田　裕
昭和ファシストの群像　小林　英夫
近代日本の思想動員と宗教統制　赤沢　史朗
日本古代の民族と天皇　直木　孝次郎

社会科学（３００）

教育学大全集　天野　郁夫　他
子どもの発達と診断　田中　正人　他
ケインズ経済学を超えて
A・レイヨンフーウッド
日本経済の構造分析　佐貫　利雄
体系　会計諸則集〔最新版〕　嶌村　剛雄　編
日本の金融システム　貝塚　啓明　他
一般理論経済学　カール・メンガー
現代日本経済論　大内　力　編
会計と社会　黒沢　清　編
企業の理論　T・ヴェブレン
法学協会雑誌総索引　法学協会　編
国際貨幣経済論　P・デヴィッドソン
社会保障年鑑　１９８６年版
健康保険組合連合会
現代経営事典　小林　規威　他
経済変動の理論　足立　英之
税務会計入門　確永　悟史
エレクトロニックマネー時代　通産省
アメリカの金融制度　高木　仁
現代社会主義における所有と意志決定
西村　可有
先物取引　第２版　原　信　他
東京マネーマーケット　原　信　他
金融・証券講座　Ⅰ～Ⅴ　貝塚　啓明　他
古典派　経済学研究　（Ⅰ）～（Ⅲ）
早坂　忠　他
女性開放とは何か　松井　やより
婦人論争を読む　Ⅰ　Ⅱ　上野　千鶴子
女性とは何か　上．下　F・シュルロ　他
批判への意志　今村　仁司
マルクス主義革命論史　１～３　広松　渉　他
わが外交の近況　昭和６１年版　外務省
ポーランドの女性問題
ロマン・ヴイエルシェフスキ
性の弁証法　S・ファイアストーン
女性的女性　アリアナ・スタシノプロス
男世界と女の神話　E・ジェインウェイ
女性学入門　富士谷　あつ子
女性学をつくる　女性学研究会　編
増補　新しい女性の創造　ベティ・フリーダン
現代コミュニティ論　園田　恭一
現代日本の生活体験　中鉢　正美
大都市における人間構造　笹山　京
家　族　T・パーソンズ　編
現代余暇の社会学　松田　義幸
くらしの統計　'８５　国民生活センター　編
労働省編　職業分類　６１年版　労働省
新商法による法律・会計手続詳解　山内　一夫
異文化の女性たち　ポール・デザルマン
主婦のための女性問題　入門第一巻～第三巻
俵　萌子　他
女性解放思想史　水田　珠枝
男性と女性　上．下．　M・ミード
マルクス主義フェミニズムの挑戦

A・クーン　他
リベレーションナウ！　三宅　義子　訳
性の政治学　ケイト・ミレット
女性とロシア　T・マモーノヴ　他
女性解放の政治学　ジョー・フリーマン
女性学とその周辺　井上　輝子
女性の権利の擁護
メアリ・ウルストンクラーフト
転換期の政治過程　杉原　勝
ヨーロッパの政治　篠原　一
女性社会学をめざして　女性社会学研究会
外国為替市場と資金市場　H・リアル　他
地方制度調査会　自治庁
地方制度調査会資料　自治庁
社会学と教育　福永　安祥
日本と発展途上国　大川　一司
時代に挑む社会学　高島　善哉
地域問題事典　総合開発研究機構　編
コミュニケイション的行為の理論　上．下．
ユルゲン・ハーバーマス
日本教育年鑑　'86
日本教育年鑑刊行委員会
事例で学ぶ教育心理学　杉原　一昭
不当労働行為事件命令集
中央労働委員会　編
ウエーバーからハバーマスへ　佐藤　慶幸
シェイン　組織心理学　シェイン
職業行動の心理学　森下　高治
犯罪白書　昭和６１年度　法務省
リーダーシップと行動の科学　占部　郁美
新しいリーダーシップ　三隅　二不二
日本の条件　８貿易　ＮＨＫ取材班
軍拡経済の構造　坂井　昭夫
国民生活白書　６１年版　経済企画庁
金融取引大系　２．４．５．６巻
鈴木　禄弥　他
コミュニティ心理学　山本　和郎
老いのスケッチ　カルドマ　他
教育心理学講座　１～４　東　洋　他編
疑わしき母性愛　ヴァン・デン・ベルグ
「図説」くらしの国際比較
国民生活センター　編
くらしの統計　'86　経済企画庁国民生活局
家庭の冠婚葬祭　生活文化研究会
民法総則講義　槇　悌次
セミナー労働時間法の焦点　菅野　和夫　他
都市問題講座　１～７　角本　良平　他
望郷の岬　行政資料調査会
ドイツとロシア　肥前　栄一
斉藤喜博全集　斉藤　喜博
不均衡の経済分析　伊藤　隆敏
国際金融と開放マクロ経済学　河合　正弘
日本企業投資と研究開発戦略　鈴木　和志　他
青少年白書　昭和６１年版
総務庁青少年対策本部
新国際秩序と平和　日本平和学会　編
労働時間の実務と法理　山本　吉人
おとぎ話にみる男と女　ヴェレーナ・カースト
行政改革と現代政治　新堂　宗幸
保守政治家は憂える　「世界」編集部
政党内閣の成立と崩壊　近代日本研究会　編
官僚制の形成と展開　近代日本研究会　編
ＰＥＴ　親業　トーマス・ゴートン
精神の起源について　C・J・ラムズデン　他
現代青年　磯貝　芳郎　他
Jeilzeitarbeit　Conradi，hartmut
シングル・ライフ　海老坂　武
日本の民族学　日本民族学会　編
文化人類学事典　石川　栄吉　他
中小企業総論　加藤　誠一　他
公共経済学　岸本　哲也
経済法概説　松下　満雄
社会と哲学　エミル・デュルケーム
話し方コミュニケーション　竹山　昭子
社会哲学　上．下　トーピッチュ
市民文化は可能か　松下　圭一
異文化間コミュニケーション
K．S．シタムラ
日本社会保険制度史　佐口　卓
現代社会事業史研究　吉田　久一
社会政策学会年報（継続購入）
社会政策学会　編
講座　障害者の福祉　１．２
一番ヶ瀬　康子　他
日本帝国主義下の労働政策　加藤　佑治
社会政策の現代的課題　飯田　鼎　他
ケインズ派経済学の探求
アラン・ゴーディントン
ヨーロッパの生活美術と服飾文化　服部　照子
共生の作法　井上　達夫
婦人労働における保護と平等
社会政策叢書編集委員会
社会政策の危機と国民生活
社会政策叢書編集委員会
法哲学と刑法学の根本問題
アルトウール・カウフマン
マックス・ウェーバーと近代　姜　尚中

階級権力と国家権力　ライフ・ミリバンド
法哲学と社会哲学　日本法哲学会　編
ユートピアと権力　上．下　升味　準之助
民主主義思想の源流　有賀　弘
演習　刑事訴訟法　田宮　裕
刑事綱要各論　団藤　重光
大塚刑法学の検討　中山　研一
刑法総論　中山　研一
日本刑罰史蹟考　重松　一義
現代経済政策論　瀬野　隆
Industrial Low　スミス・ウッド
日米欧の雇用と失業　笹島　芳雄
労働契約法の理論　下井　隆史
講座　民事訴訟　1～7　新堂　幸司　他
新　損害保険双書　1～3　田辺　康平　他
裁判実務大系　1～9　園部　逸夫　他
現代韓国の憲法理論　兪　鎮午　他
人民主権思想の原点とその展開
ホセ・ヨンパルト
海商法詳論　田中　誠二
西ドイツの農家相続　K．クレッジェル　他
ドイツ市民法史　村上　淳一
中国憲法概論　薫　成美
共犯論上の諸問題　植田　重正
刑事裁判の諸問題
岩田　誠先生傘寿記念刊行会
注釈　株式会社　上．下　今井　宏　他
日本の食文化大系　1～21　瀬川　清子　他
商売往来風俗誌　小野　武雄
江戸の歳事風俗誌　小野　武雄
現代日本の労務管理　白井　泰四郎　他
フランスの家族法　稲本　洋之助
改正　社会法の研究　今井　宏　他
初期　イギリス経済学　3．4．10．11
チャイルド　他
刑法講義　内藤　謙
刑事訴訟法　渥美　東洋
労働法講義　2．3　角田　邦重　他
法律　ラテン語辞典　柴田　光蔵
米国における出入国及び国籍法　上．下
布井　敬次郎　訳
社会　労働運動大年表　1～3．別巻
法政大学大原社会問題研究所　編
民法概論　1～4　星野　栄一
注解　民事手続法 1．2．3．4．4～1．8
麻上　平信　他
西ドイツ普通取引約款規制法
ホルスト・ロッヒャー
フランス保険法典　岩崎　稜　監訳

平和を考える　A．モタンギュ
日本の光と影　ジャレッド．テラー
第九回帝国議会の民法審議　広中　俊雄　他
世界経済白書　昭和61年度　経済企画庁
国民経済計算年報　経済企画庁
鳥羽駅前再開発調査報告書
三重短期大学地域問題総合調査研究室
国際金融と開放マクロ経済　河合　正弘
日本の財政赤字構造　井堀　利宏
財政構造とマクロ経済分析
マーティン・フェルドスタイン
経済計算の理論　松田　和久
経済動学の理論　宇沢　弘文
資本論入門　ヨハン．モスト
政治学概論　山川　雄己
中国古代服飾史　周　錫保

自然科学（400）

Instrumental analysis of food．Vol．2
George charalmbous．
Analysis of foods and beverages．
George charalmbous．
医の心　1～5　沢瀉　久敬　他
Food the chemistry of its components．
T．P．Coultate．
Food chemistry．　Tennema　Owen．
新実験化学講座　全巻　日本化学会　編
本草備要　上．下　呉　福明　他
バイオの小箱　ヨエル・ラスニー
アサリの殻内に生息するカクレガニの生活史
角田　保
梅ぼしの効果　松本　紘斉
Principles of sensory evaluas ion of food．
M．A．Amerine．
Enzymes in food processing
Ferald Reed．
Food texture and viscosity
M．C．Bourne．
The Analysis of Nutrients in food
D．R．Osborne．
Water relation of foods．
R．B．Duckworth．
Statistical method in food and consumer research．　M．G．Gacula．
伊能忠敬の科学的業績　保柳　睦美

黒部川扇状地研究　黒部川扇状地域社会研究所
食文化への提言　①　②
食べもの文化研究会
世界各国の食生活指針　全国食糧振興会
麹カビと麹の話　小泉　武夫
健康食品論　富田　勉
卵　浅野　悠輔　他
甘味の系譜とその科学　吉積　智司　他
食物の栄養と効用　成瀬　宇平
恐るべき健康食品業界の実態　梅崎　由紀夫
サイエンティスト　ジョン．C．リリー
体の異常がはっきり解る血液検査　星崎　東明
あなたの食卓の危険度　西岡　一
改訂　日本食品アミノ酸組成表
科学技術庁　編
有機化学15億秒　野崎　一
免疫系のメカニズム　古谷　克　監修
物質の理解　加藤　俊二
システムと進化　リン・ホフマン
食べ方暮し方・治し方　館野　幸司　他
がんにならない食事学　河内　卓
レクチン　大沢　利昭　他
代謝マップ　日本生化学会　編
思春期病棟・理論と臨床
ドナルド．B．リンズレー
栄養と健康の言葉早わかり事典
新しい栄養学を考える会
日本の食生活　22．39．40　農文協
厚生白書　昭和61年版　厚生省
食品の熱物性　N．N．モーセニン

工学及び家政学（500）

きもの仕立ての勘どころ　加藤　与一
新　きもの作り方全集　大塚　末子
最新　和裁全書　波多江　穂野
繊維製品の商品学　北原　三郎　他
わかりやすい和裁　沖野　正子
学生のための被服構成　筒井　京子　他
サンベルト　川出　亮
デトロイト・マインド　ブロック・イエーツ
ファッション年鑑　'86　城　一夫　他
らくらく和裁　黒須　敏子
これだけは知っておきたい新素材・新材料のすべて　工業材料編集部

日本草木染譜　山崎　斌
料理のコツ事典　滝口　操
繊維産業は生き残れるか　吉岡　政幸
繊維の実際知識　中村　耀

産　業（600）

日本企業のマーケティング行動
石井　淳蔵　他
マーケティング・管理と戦略　小島　健司　他
現代マーケティング論　白髭　武
競争経済下のマーケティング　田内　幸一　訳
マーケティング論　白髭　武
ジェトロ貿易白書　貿易編　1986
日本貿易振興会
地域調査法　古島　敏雄　他
日本の文化産業　庄林　二三雄
サービス労働論　渡辺　雅男
マーケティング　村田　昭治
現代マーケティングの基礎理論
田内　幸一　他
ダイナミック・マーケティング　市川　繁
ベーシック・マーケティング
E．J．マッカーシー
総合マーケティング　嶋口　充輝
新田開発　菊地　利夫
食のデーター・エッセイ　黒田　節子
日本型流通システム　田村　正紀
ジェトロ白書　投資編　1987
日本貿易振興会
80年代の新産業構造の展望と課題
通商産業省編
水産加工品総覧　三輪　勝利　監

芸　術（７００）

美の理論　テオドール・W・アドルノ
一本の糸から　１．２　内田　紀子
染・織　軍司　敏博　他
染織の文化史　藤井　守一
色の手帳　尚学図書編
日本の美術　２４６～２５１　文化庁
「日本人とプロ野球」研究　南　博
夢の覗き箱　種村　季弘
裁かれる記録　安部　公房
僕の映画をみる尺度　三島　由紀夫

語　学（８００）

The Oxford English Dictionary.　Vol.14
R.W. burchtield
現代　先端用語事典　角間　隆
応用言語学講座　２．３．６．　林　四郎　編
言語理論の確立をめぐって
ルイ．イェルムスレウ
形式意味論入門　白井　賢一郎
思考と行動における言語　J．I．ハヤカワ

文　学（９００）

欧米文芸登場人物事典　C T．アジザ．他
キャッツアイころがった　黒川　博行
新潮日本文学アルバム　１～３６　新潮社
昭和文学アルバム　磯田　光一
大正文学アルバム　紅野　敏郎
父の詫び状　向田　邦子
いのち華やぐ　瀬戸内　寂聴
破れた繭　開高　健
「ん」まであるく　谷川　俊太郎
トラちゃん　群　よう子
大人のための残酷物語　高橋　由美子
たんぽぽのお酒　レイ．ブラッドリー
シングル・セル　増田　みず子
ボウアリー夫人の手紙　ボヴァリー
黄金の女達　小島　信夫
奴隷の寓話　小島　信夫
最後の講義　小島　信夫
ユゴー詩集　辻　昶　訳
井上ひさしの世界　井上　ひさし
にっぽん博物誌　井上　ひさし
不忠臣蔵　井上　ひさし

全国ベスト・セラーズ調査

３月１日調

１位　大前研一の新・国富論
大前　研一　著
２位　千日の変革　堺屋　太一　著
３位　マンガ日本経済入門
石ノ森・章太郎　著
４位　六星占術の極意　細木　数子　著
５位　ユダヤが解ると日本が見えてくる
宇野　正美　著
６位　久米宏の金曜チェック
ニュースステーション制作班　著
７位　ビジネスマンの父より息子への３０通の手紙
K．ウォード　著
８位　牧野昇の逆説日本産業論
牧野　昇　著
９位　ビートたけし不幸中の幸い
ビート　たけし　著
10位　最後の超念力　石井　普雄　著

（出版ニュース社　１月３１日調）